



慶應義塾大学ビジネス・スクール

ベネトン・ワールドワイド（Ⅱ）

ルチアーノ・ベネトンの夢は世界に広がっていた。ベネトン・ゴーズ・エニイウェア・インザ・ワールド（BENETTON GOES ANYWHERE IN THE WORLD）という言葉に表されているように、ベネトンの欧州、米国に次ぐ第3の標的市場は日本であった。ベネトン社は、1987年6月に同社の100%出資子会社、ベネトン・ジャパンを資本金500万円で設立した。同社の社長は西武百貨店の婦人服飾部、池袋店営業企画部、ミラノ駐在を経て1986年に西武を退職した遠藤氏である。遠藤氏は西武百貨店時代の1977年から約10年間、初代ミラノ駐在員としてイタリアに在住し、数多くのイタリア商品の輸入に奔走する一方、アパレル・メーカーなどに幅広い人脈を形成し、ルチアーノ・ベネトンとの親しい親交のなかから、請われて社長に就任したのであった。

ベネトン社は日本市場では既に、西武セゾン・グループのメンバー会社リンツとライセンス生産の契約をしており、また、リンツは小売店ライセンス契約の窓口ともなっていた。従って、ベネトン・ジャパンの役割は、イタリアのベネトン社にかわってリンツの経営指導を行うことであった。ベネトン・ジャパンはこの他、リンツ社がベネトン社と契約していない新しいブランド衣料や雑貨、インテリア類のライセンス事業を展開する予定であり、3年後の1990年には30億円の年商を計画していた。

このケースは、新聞雑誌その他の刊行資料を基にして慶應義塾大学ビジネス・スクール教授和田充夫が作成したものであり、ケース中の記述に誤りがあるとしたならば、その責はケースライターにある。このケースは教材として使用するために作成したものであり、特定の経営管理上の巧拙を例示するものではない。1989年8月